

# アクティブラーニングを取り入れた大学FD授業のあり方と一考察 ～「保育カリキュラム論」の授業を通して～

戸井 和彦

聖カタリナ大学短期大学部

## 1 授業を行う上での前提条件

短大保育学科の2年生55名に「保育カリキュラム」の授業を実施した。講義形式で2単位認定になっている。全15コマである。最初の1コマ目の授業を終えたあと、感想を自由記述式で書かせた。

その一例を以下に挙げる。

「カリキュラムが何なのか、カリキュラムがなぜ大切なのがよく分かりました。カリキュラムをつくることで保育の共通理解がもっと広がればいいなと思います。今後、仕事に就く上でも大切なことなので、しっかり覚えておきたいです。」

「カリキュラムという言葉はよく聞きますが、具体的な意味や詳しい内容を理解できていなかったため、学ぶことができてよかったです。」

授業題目にもある「カリキュラム」というような用語の意味自体がよく分かっていないこと、とにかく理解しようと考えていることが予想できる。

全員の感想をテキストマイニング用のフリーソフト KH Coder を使ってその中に出てくる動詞を抽出してみると表1の結果が得られた(頻出回数10以上の単語のみ。「スコア」は、与えられた文書の中でその単語がどれだけ特徴的であるかを表している。)

表1 1コマ終了後の感想の中に出てくる動詞

動詞	スコア	頻出頻度
思う	1.31	48
できる	0.68	27
分かる	2.89	24
作る	0.7	17
知る	0.72	16
いく	0.28	13
学ぶ	3.37	13
覚える	1.12	11
遊ぶ	0.98	10

「分かる」「知る」「学ぶ」「覚える」などの動詞が多く、教師から知識などを受け身的に学ぶという姿勢を強く感じた。それも必要であるが、こういった授業をずっと続けていくと、学んだことを今後の保育の現場などで生かすことが難しいと感じた。

2年間で保育士や幼稚園教諭などの資格取得が最大の目標になっており、そのために短期間で多くの単位を取ることが求められている。どうしても知識・理解に重点を置いた授業づくりに偏りがちである。

しかし、次のような感想もあった。

「自分で考えることができてよかったです」

確かに、知識を身に付けたといっているが、自分で考えて学ぶことも望んでいることが分かる。しかし、時間的な制約もあり、そんなに多く考える活動もできないのが実情である。

## 2 アクティブラーニングの手法を取り入れて

次の仮説を取り入れ、以後の授業を実施した。

講義型授業の中に多様なアクティブラーニングの手法を取り入れることで、より主体的に学習に取り組むことができるのではないかと。

アクティブラーニングの手法は多様であるが、ねらい、学習内容がはっきりとしている講義内での実施ということもあり、次のような活動を主に取り入れることにした。

①自作のワークを毎時間配り、書くことで自分の考えをまとめる(授業使用するテキストは法令集のみ)  
②近くの人と話し合いの場を設け、共通に出て来た意見を発表する。グループごとに小ホワイトボードに書かせて前に貼り付け、発表をする。

③事例を取り取り上げる

(教育実習、保育実習とのつながりを意識して)

④写真、グラフ、表などの資料の読み取りを入れる。

⑤2つの事柄を対比させ、考えさせる。

⑥フラッシュカード、カルタなどの教材を活用する。

⑦体験しながら、計画(例えば保育案)を考える

こういった活動をその日の学習内容に合わせて取り入れたのであるが、全く自由にさせると授業が混

沌としてくるので、毎時間に配布するワークによって学習内容をきちんと決めておき、その枠から出ないようにした。そして、学生にストレスを感じさせないようにし、考えの変容を引き出すよう心掛けた。

筆者は小学校で長年、教員をしてきたが、いずれもよく使ってきたアクティブラーニングの手法である。すべてが大学生に通用するとは限らないが、毎時間、いずれかの方法を取り入れてみた。

これを学生の授業後に書かせた自由記述の感想に出てくる単語、共起性に着目し、検証を試みた。毎回、授業の感想をアンケートに取りつつ、テキストAは、1コマ目の授業が終わったあとに実施した自由記述のアンケート、テキストBは全15コマが終わったあと記述した感想である。

### 3 結果と考察

解析対象の文書に現れる単語がどちらの文書により多く出現するか、またその単語の意味がどれだけ特徴的であるかを2次元でマッピングした(図1)。単語が左寄りになっているほど「1コマ目終了後(入力テキストA)」により多く現れることを、右寄りになっているほど「全15コマ終了後(入力テキストB)」により多く現れることを意味している。単語が上寄りになっているほど特徴的な単語であることを、下寄りになっているほど一般的な単語であることを意味している。

全授業を終えた後の感想からは「生かす」「考える」「実習」「現場」「活動」という用語が以前に比べて大きく出ていることが分かった。「生かす」「考える」

などの用語の頻出度が最初に比べて大きく伸びていた。「楽しい」というような用語も増えていた。また、共起性を表示してみると以下のようになった(図2)。

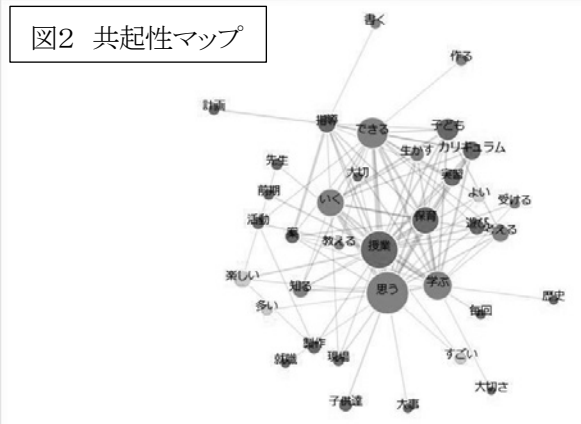


図1と図2の結果などから、決められた授業時間内にアクティブラーニングを取り入れた方法を実施することで、学生の学び方が主体的に変わっていくことが分かった。ある学生の感想である。

「カリキュラムやたくさんの人の考え方を知り、私はこれは違うと思うな、よくわからないなと思うところもあったし、この考え方がいいな、私だったらこうしたいなあと考え方が広がっていきました。事例を挙げてグループになって考え、発表し、みんなの意見を聞くこともとても勉強になりました。私が気づけなかったところをみんなが補ってくれていました。」

ただ、講義型授業にアクティブラーニングをどの程度取り入れるのか、どういった手法が効果があるのかは今後の課題として研究を継続していきたい。

